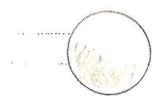
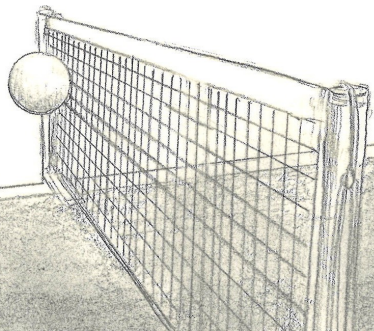




あとがき	9	8	7	6
153	自立	沢田先生	球出し	崩壊寸前
	143	113	108	94



5	4	3	2	1
けんか	部内リーグ戦	一年生指導	めがねマスク	新しい顧問
78	63	39	13	5



「ようっ」

日向が快哉の声を上げた。

(角度が甘かったな)

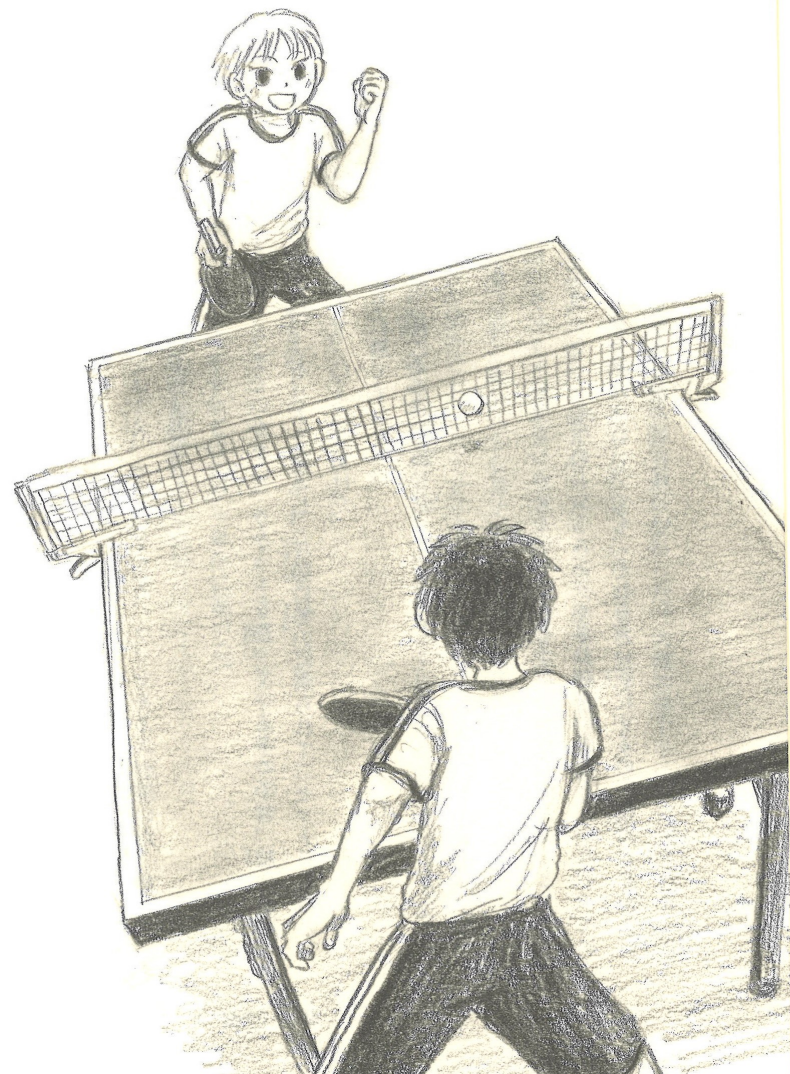
拓はレシーブのラケット角度を振り返る。サーブが良かったのではない。自分のレシーブがまずかったのだ。相手のサーブの回転量に対して、ラケットを寝かせすぎた。

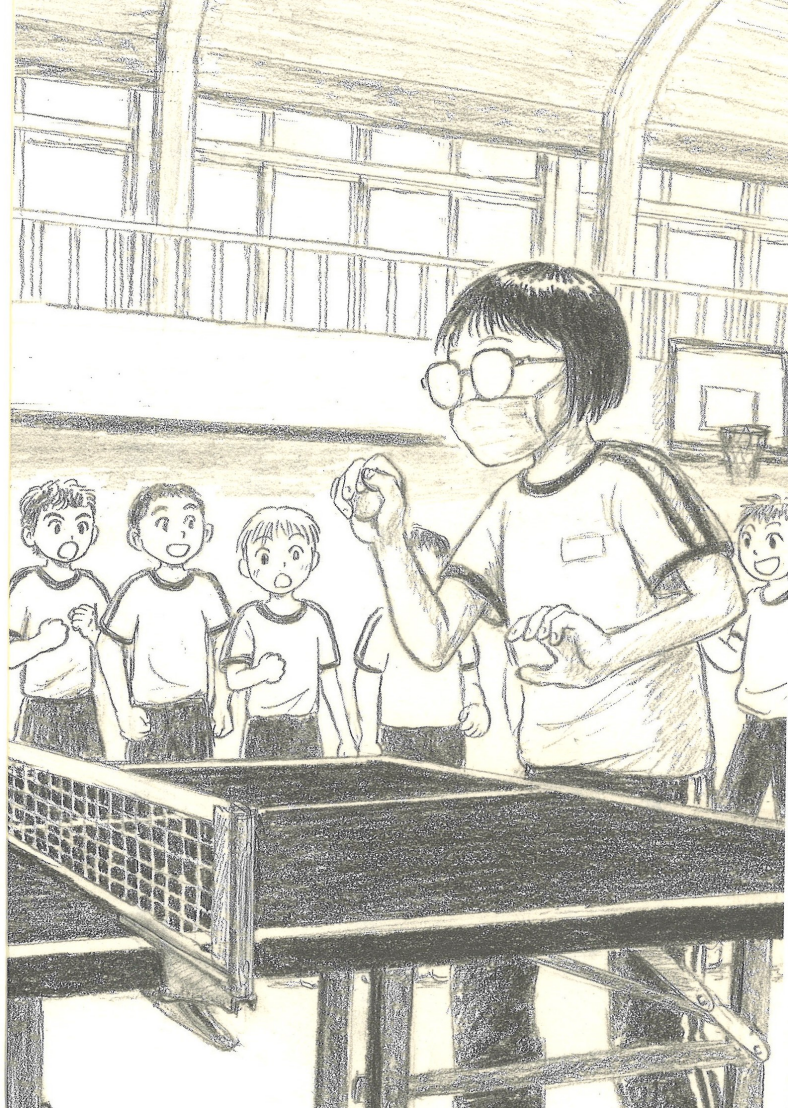
二本目のサーブが来た。同じ下横回転。予想通り、一本目のサーブより切ってきた。一球目のレシーブが浮いたので、拓が角度の修正を図ってくることを予想して、その裏をかいて、ネットミスさせようという作戦だ。日向が考えそうなことだ。それを読んで、拓はラケットを寝かせて丁寧なレシーブを試みた。しかし、自分の意思と違い、腕と手首はラケット角度を思った以上に立ててしまった。あれっ。その瞬間、球はネットにかかった。

「よっしゃあ」

日向が、また声を上げた。自分の作戦通りになったことを満足しているようだった。

腕と手首の動きが、自分の意思と微妙にずれていることを拓は感じた。その感覚は他





と、拓は次々に球を送った。

その子は、何度も右手で球をつかんで、投げ返した。

「素手でつかめるんだから、ラケットでも同じ感じでやれば、球に当てられるはずだよ」  
拓はそう言って、めがねマスクにラケットを握らせた。

「じゃ、いくぞ」

ゆるい球を送ってやる。

めがねマスクは、緊張気味の様子だったが、飛んできた球をうまくラケットに当てた。  
球は壁のほうに飛んでいった。

「よっしゃっ」

拓が声を上げ、その子はうれしそうに飛びはねた。

「当たった」

「すっげえ」

他の一年生も驚いたように歓声を上げた。

一番へただっためがねマスクが、球を打てるようになって、さっきまでうまくできずや